

クマの生息地に接した場所では、日頃から、ヒグマと人に安全な暮らし方をすることが大事！

となりのヒグマとともに生きるために

うちの近所には、クマ、いないよね？

いいえ、ヒグマは、裏山や防風林、川の名ば、あなたの暮らしのとなりに必ずいます。人から隠れながら、静かに暮らしています。ヒグマが生息する北海道の自然の豊かさを上手に分け合っ、安全に暮らしていくために、ヒグマとの3つのルールを身につけよう。



クマがいる可能性を常に忘れないで行動しよう。近所の野山へのハイキングや、山菜採り、家の裏で畑仕事をする時も。

なるべく複数人で山に入ろう。複数で行動している人を、ヒグマが襲った事故の例はこれまでありません。



山に入る時は「これから行くよ！」と、クマに知らせよう。声をかけたり拍手をしたり。クマが隠れることができるように！

基本装備
クマ鈴、ラジオ、クマよけ笛、クマ撃退スプレー

周囲の様子に常に気を配ろう。
音 ガサッという音、鳥の声など
跡 足あと、食べたあと、爪あと、背こすりあと、フンなど
匂い 獣の匂い、動物の死体や血の匂いなど

クマ鈴や携帯ラジオで、賑やかに！人がいることを知らせよう。常に、人がいることをアピールしよう。藪の中に入る時は、特に要注意。

食事をとるときは見晴らしの良いところで。食べものや容器を捨てないで、必ず持ち帰ろう。

最重要！人間の食べ物の味を覚えさせない

ゴミの捨て方 生ゴミなどを放置しない。
家庭菜園やコンポスト 庭や畑に電気柵をつけるなどの対策をする。札幌市などには家庭菜園用電気柵の購入補助・貸出の制度があります。あなたの自治体はどうか、調べてみよう。



クマは学習してエスカレートする動物。人の食べ物は美味しい！人はそばにいても怖くない！！など学習すると、どんどん性質が変わってしまいます。



ペットや家畜の餌を外に置きっぱなしにしない。犬を襲うクマもいます。ペットの安全も確保しよう

裏山と畑や庭との間の草刈りをする。家の周辺の見通しをよくすることで、クマが近づきにくくなります。



近所に出たら出没情報を知る

その3 「地域名、ヒグマ、出没情報」で検索してみよう。
北海道 市町村ヒグマ関連情報リンク集 - 環境生活部環境局自然環境課
<https://www.pref.hokkaido.lg.jp/ks/skn/higuma/joho.html>
こちらのサイトも参考になるよ！
北海道のヒグマ対策のHP
<https://www.pref.hokkaido.lg.jp/ks/skn/higuma/kihon.html>
知床財団のヒグマ対処法 HP
<https://www.shiretoko.or.jp/library/bear/>
札幌市のヒグマ対策HP
<https://www.city.sapporo.jp/kurashi/animal/choju/kuma/index.html>



クマの生態について正しい知識を持とう。北海道入必読！おすすめはヒグマの会が作成した「ヒグマノート」クマの生態や万が一の時の対処の仕方がわかりやすく書かれています。



クマに出あってしまったら!!
静かに集まってクマを見ながら、ゆっくりとあとずさり...
死んだふりはどうなの？
最悪の場合は死んだふりではなく、首の後ろとお腹を守る防御姿勢を。

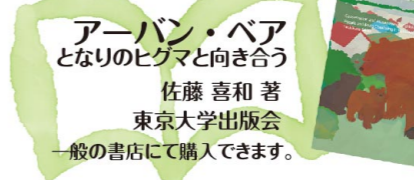
クマ撃退スプレーを使う
噴射距離は5mくらい。使えるのはクマがごく近くに迫った時。スプレーを構えることで落ち着いて逃げ出さずすみ、クマを興奮させない効果もある。

身の危険、どう守るの？「出あわない」が最良の策、しかし出あってしまったら。止まれ・逃げるな・集まれ絶対に走って逃げない

目撃したら、あるいは被害を受けたらどこに連絡するの？ヒグマを目撃したり、フン、足あとなどを発見した場合は、最寄りの警察までご連絡ください。

アーバン・ベアについて

森に接した住宅街や、森からつながる河畔林や水路や緑地などを伝って都市部にまでヒグマが出没するようになりました。都市周辺に生息し、都市の内部にまで出没する可能性のあるクマを「アーバン・ベア」と呼んでいます。「アーバン・ベア」の出現の背景には、減少していたヒグマが増加傾向にあり、分布範囲も拡大していることに加え、人と出会っても怖い経験をしたことがないヒグマが増えていること、みどり豊かな街づくりの結果、クマの生息地である森林と都市部をつなぐ河川や緑地がヒグマが移動できるコリドー（回廊）になったことなどがあります。街に入ってきてしまったヒグマについて、「駆除しないで、麻酔で眠らせて森へ返すことはできないの？」という声寄せられます。しかし、ヒグマのような大型の動物を麻酔銃で眠らせるには、資格と高い技術を持つ専門家が30m以内に接近して発射する必要があります。また薬の効果が見れるまで数十分かかり、この間に興奮して市街地を走り回る可能性もあるため、事前に周辺住民や歩行者を避難させる必要があるなど、市街地での実施は現実的ではありません。



新田薫/エトブン社
北海道のイキモノをテーマに絵と文を描いているイラストレーター。トカゲと鳥とエゾシカが気になる。猫とキツネを見たら追いかけろ。クマはちょっとコワイ。好きなことは森と動物園と水族館の散歩。札幌出身。
<http://etobunsha.com>

人とヒグマが共生していくことが理想ですが、同じ場所と一緒に暮らしていくことは難しい。だったら場所を分けて、ヒグマは森林の中で、人は人の生活圏の中でそれぞれ暮らすことを目指そう、というのが、となりのヒグマとのつきあい方。しかし、いったん人の生活圏に入ってしまったクマは、人間の安全な暮らしを守るために駆除せざるを得ないのが現実です。ヒグマが人の生活圏に迷い込んでしまわないように、人間がその境界線をクマに分かるように管理し、人の生活圏を守ることが、森林に暮らすクマを守ることに繋がります。

お話を聞いた人

佐藤 喜和さん
酪農学園大学環境共生学類 教授
1971年東京都生まれ。北の自然に魅せられて北海道大学に入学。同大ヒグマ研究グループに参加してヒグマにはまる。農学部応用動物学教室を経て、東京大学大学院農学生命科学研究科博士課程終了、博士（農学）。浦幌町や札幌市を主な調査地に、ヒグマの生態と札幌管理に関する研究や、保全活動を続けている。ここ数年、四国のツキノワグマ保全にも取り組む。ヒグマの会事務局長、日本クマネットワーク代表。

宮本尚/きたネット
森好き、ヘンなイキモノ好きは、オホーツク海を眺めて買った子どもの頃から。最近はキノコのトリコ、シンガーソングライター、宮本尚Song Gardenというバンドでライブハウスなどで時々演奏しています。
<http://kitanet.org>